

戦前・戦中の在日留学生に対する直接法による 予備教育用日本語教科書

国際学友会編『日本語教科書 基礎編・巻一～五』

—その編纂・内容・使われ方—

“Japanese Language, Basic, vol. 1-5” edited by International Student Institute, a textbook of learning Japanese by the direct method for preparatory students written in 1940-1943.

—The edition's process, content and influence—

河路 由佳

1936年より在日留学生のための日本語予備教育を行っていた国際学友会は、1940年から1943年にかけて「基礎編」「巻一～五」の六冊から成る『日本語教科書』を発行している。敗戦とともにほとんどが処分されてしまった幻の教科書である。

本稿では、当時の関係者の証言と周辺の文献資料を合わせて、その編纂の様子を辿り、岡本千夫太郎が主編者で、ほかに松村明、武宮りえが執筆者であったことを特定する。

また、内容について、文型積み上げ型構造シラバスの萌芽の内容を持つこと、侵略的な日本語普及が推進されていた時代にあって、平和的国际交流を目指した内容が見られることを指摘して再評価を行い、表記法に関する特別な配慮に当時の国語問題の反映を見、戦況が悪化するにつれて当初の編者の構想が実現不可能になってゆく過程、またこの教科書の使用状況から、戦時期の日本語教育をめぐる状況の側面を明らかにする。

キーワード：留学生教育、基本文型、表記法、岡本千夫太郎、日本語教育と戦争

1. はじめに

日本で学ぶ留学生は、明治時代にはその大半が中国からの学生（いわゆる清国留学生）であった。日華学堂、亦楽書院（後に宏文学院）そして東

亜高等予備学校（後に東亜学校）など、留学生専門機関のみならず、法政大学、早稲田大学、実践女学校など、留学生の受入れ先でも特別のコースを用意して、その日本語予備教育を行っていた。

教科書としては、松本亀次郎の『言文対照・漢訳日本文典』（1904）、『改訂 日本語教科書』（1906）、『漢訳日本口語教科書』（1919）、また松下大三郎の『漢訳日本口語文典』（1907）などが広く使われ、ほかにも教材は多く出版されているが、学生の母語が一つであったため、いずれも中国語による説明や中国語訳が眼目になっている。それぞれの機関の内部で作られ使用されていた教科書もあったと思われるが、それらについても、中国語を媒介とする事情は共通していたと推察される。

昭和の時代になり、中国以外の国々との交流も盛んになると、様々な国から留学生が来るようになる。外務省も状況に対応するため、1934（昭和9）年に文化事業部を新設し、その一課・二課は対中国、三課はその他の国際文化事業を行うことになった。その第三課の仕事として、中国以外の地域からの留学生のために翌1935年に設立されたのが、国際学友会である。

国際学友会は設立の翌年から日本語教育を始めている。私費留学生のほかにも招致学生、交換学生をも受け入れており、その出身地はインド、イタリア、ポーランド、フランス、ブラジル、アメリカ、ドイツ、フィリピン、アルゼンチン、ペルー、イギリス、ボリビア、ハンガリー、メキシコ、ビルマ、インドネシア、安南（ベトナム）、ウルグアイ、白系ロシアなど広範にわたっていた。ほかに、海外より帰国した日本人も受け入れている。

留学生の母語が多様であることもあり、国際学友会での日本語予備教育は直接法で行われた。そして、直接法による、日本語予備教育用教科書『日本語教科書 基礎編・巻一～五』が編纂されることとなったのである。1940年から1943年にかけてのことであった。

しかし、完成まもなく敗戦となり、その混乱の中で、そのほとんどが処分されてしまうという不幸な運命を背負っていた。戦後は当の国際学友会の内部でさえ、知られぬ存在となっていたという。見ること自体が困難で

あり、その全巻の内容についてまとめて語られることは現在にいたるまでなく、編者についても不詳であった。

筆者は、ここ数年にわたって、戦前・戦中の日本語教育について調べ、関係者にお話をうかがうことを行っているが、その中で『日本語教科書』の実物に出会い、ようやく、全巻に目を通すことができた(注1)。また、1994年から1996年にかけて当時の国際学友会を知る5人の方々にそれぞれお話を伺い、具体的な証言を多く得ることができた(注2)。お話を伺ったのは、次の方々である。(括弧内は国際学友会の在職期間)

後藤(旧姓 大島) 優美先生(1939年はじめ～1941年8月)

松村 明先生(1940年4月～1944年8月)

水野 清先生(1941年秋～1943年はじめ)

中村(旧姓 永島) 愛子先生(1941年6月～1945年秋)

金田一 春彦先生(1943年～1944年)

本稿では、『日本語教科書 基礎編・巻一～五』について、それらの証言や残された文献資料から、その編纂過程を辿り、本文の内容について考察し、それらがいかに使われ、また使われなくなっていったかを検証する。その作業を通して、今まで一面的に語られることの多かった戦前・戦中の日本語教育の一側面を具体的に明らかにし、再評価を試みたい。

記述の客観性のために伺ったお話はまとめてご本人に確認・訂正をしていただいたものを文献資料に準ずるものとして扱い、以下、文中ではお名前の敬称を略することをお許しいただきたいと思う。

なお年号は基本的に西暦で記すが、便宜のために必要な場合には元号を用いたものも括弧に入れて示すこととする。

2. 戦前・戦中の国際学友会編『日本語教科書』の性格とその価値

国際学友会編『日本語教科書』の奥付にある刊行年は次の通りである。

『日本語教科書 基礎編』1940(昭和15)年12月

『日本語教科書 卷一』1941（昭和16）年1月

『日本語教科書 卷二』1941（昭和16）年9月

『日本語教科書 卷三』1942（昭和17）年3月

『日本語教科書 卷四』1942（昭和17）年11月

『日本語教科書 卷五』1943（昭和18）年4月

ほかに、1941年に『重要五百漢字とその熟字』が、刊行されている。

これらは、戦後の国際学友会の教科書同様、在日留学生の日本語予備教育用の教科書で、直接法で教えることを前提として書かれたものである。全く日本語を知らない留学生に、日本語を使って、日本人と共に、日本の高等教育機関で学べるだけの日本語力をつけることが目標とされている。

戦後、国際学友会の鈴木忍・阪田雪子による『NIHONGO NO HANA-SIKATA』『日本語読本卷一～四』（国際学友会）をはじめとして、直接法による文型積み上げ型の構造シラバスによる予備教育用教科書は多く作られるようになるが、本稿でとりあげる『日本語教科書 基礎編・卷一～五』は、それに先行するものであり、直接法による在日留学生の日本語予備教育用教科書の本格的なものとして最初のものと思われる。

その価値について、筆者が特に注目しているのは次の点である。

(1) 教科書自体のもつ、内容的価値。

①現代日本語に関する意欲的な研究にもとづき、今日一般的である文型積み上げ型構造シラバスの萌芽的なものが認められること。

②国家をあげて植民地や占領地に向けていわゆる侵略的な日本語教育が推進されていた時期にあって、それとは異質の留学生のための平和的交流をめざした内容が認められること。

(2) 当時の日本語教育をめぐる状況の証言者としての価値。

①日本語の表記や、「基礎語彙」「基本文型」などをめぐって議論が活発に行われ、いわゆる国語運動の盛んだった時代的背景を反映して、特に表記などに格別の配慮が見られること。

②この教科書が刊行される1940年から1943年の間に、戦況は悪化する

が、それにつれて当初めざされていた方向が、次第に閉ざされていく過程が辿れ、その使われ方などを見ても、当時の日本語教育の事情のある一面を如実に語っていると思われること。

これらについて考察し、再評価するのが、本稿の目的となるが、それは、半世紀以上隔たった今日においても、日本語教育、中でも留学生に対する日本語予備教育に対して、重要な示唆を与えてくれるはずである。

3. 『日本語教科書』の編纂

3-1. 主編者・岡本千万太郎

この『日本語教科書』の主編者は、岡本千万太郎である。岡本は、1902（明治35）年に生まれ、1928（昭和3）年に東京帝国大学文学部国文科を卒業、横須賀高等女学校の国語教師を経て、1939（昭和14）年の4月に、国際学友会の主任教授に就任した。

『日本語教科書』をはじめとする戦前の国際学友会の仕事については、岡本千万太郎の果たした役割が大きい。このことは今まで語られていないが、『日本語教科書』についてももちろんのこと、戦前・戦中の国際学友会を語るには岡本の夢に描いた構想とその実践、そして、その挫折の過程をはっきり確認しておく必要がある。

国際学友会編『日本語教科書』の編者については、奥付等に記載はなく、新内康子1993に、「この教科書（筆者注：『日本語教科書 基礎編』）の編纂には岡本千万太郎が携わったが、音声教育を重視した教科書が編纂された背景には、国際学友会で岡本より一年先に日本語教室主任として日本語を教えていた服部四郎や語彙調査を担当していた大西雅雄の影響が少なからずあったものと思われる^(注3)」とあるばかりであった。

『日本語教科書 基礎編』が音声に関する専門的知識を盛り込んで書かれていることから、服部四郎や大西雅雄の音声学に関する業績が想起されたものであろうと思われる。筆者も、これを確認しようとすることから始

めたが、その結果、服部と大西の影響は考える必要がないとの結論を得た。

「基礎編」については、岡本千万太郎の著書『日本語教育と日本語問題』(1942)に繰り返し触れられており、中心となった編者が岡本であることは明白である。「基礎編」の第一部、発音の最後には音声学の知識に基づく「音韻と仮名の対照表」が掲載されているが、これは同一のものが岡本の著書『日本語教育と日本語問題』(p. 79)に掲載されており、岡本が「この表は『国語教育』1939年2月号に佐久間鼎博士が改定音図として示されたものなどを参考にして作ったものである」と解説している。因みに岡本は最初の著書『国語観—新日本語の建設』(1939)に、自身について「音声学に熱心であった時代もありました(p. 2)」と記している。

少なくとも音声教育を重視しているからといって、即ち服部四郎や大西雅雄の「影響が少なからずあった」と推測する必然性は認められない。

第二部の「基本文型」についても、当時岡本は雑誌『コトバ』や『国語教育』等にこれをめぐる論考を寄せており、『国語教育』の1940年2月号から5月号まで『国語教育』に連載された「基礎文型の研究」の最後に「国際学友会から発行されている『日本語教科書 基礎編』は、こうゆう考え方を具体化した文法的日本語教科書である。しかし、これは私が日本語教育に従って間もなく、急いで書き下ろしたもので、今から思えば、不満な点が多い。」と述べていて、岡本が執筆したことは明らかである。

服部四郎は、1938(昭和13)年4月に国際国友会の日本語教育に関わる初めての「専門の学者」(金沢1973, p. 9)として迎えられた。当時30歳、その二年前に留学地の「満州国」から帰国したばかりの若き学者であった。「服部四郎先生定年退官記念論文集」の年譜には、この時期は東京帝国大学文学部講師と大正大学文学部および専門部高等師範科講師をしていたとあるのみで国際学友会のことには触れられておらず(注4)、在職期間が重なる後藤優美氏のお話には「(服部氏は)大変お偉い先生だとは伺っていましたが、ほとんど授業をなさるということはなくて、私はあまりお目にかかることはありませんでした」とあるのを考え合わせると、いくつかの仕

事のうちのひとつとして国際学友会に来ていたのかもしれないが、国際学友会で、留学生に対する日本語教材開発のための仕事を始めたのは確かであるようだ。石黒修「基本語彙と語彙調査」1940に、「国際学友会の服部四郎氏の¹（未完成で中止）^(注5)」とあり、高橋一夫1968の文中に「服部博士もいつのころか国際学友会の日本語学校で教えておられたということで、教科書の用語調査をされたとかいう、そのカードをみせられたことがあった^(注6)」とあるのも、それを示唆している。しかし、期間も短く完成は見なかったようである。

服部は一年で去り、入れ代わるように岡本が来るが、岡本は、その著書に記す肩書きにも「国際学友会主任教授」と掲げており、国際学友会で実際に教えながら教科書を編集することを専らとしていた。その意味では岡本は国際学友会の最初の専門的知識をもった日本語教師であった。服部より6歳年長の岡本は着任当時37歳、既に国語教師として実績を積み、国語教育や国語問題について、盛んに発言する論客であった。着任間もない1935年5月に、それまでに発表したものをまとめた著書『国語観』を出したが、同6月19日には石黒修や服部四郎、金田一春彦ら50余名の集まる中、盛大に出版記念会が催され『国語運動』第3巻第10号（昭和14年10月）の書評でも高く評価され、その後、岡本が国語協会に招かれて講演するなど、大評判を博したようである。

「基礎編」に続く「巻一」以後の編纂のために1940年の4月からスタッフに加わった松村明氏が「『基礎編』は服部さんは全く関係していません。あれは岡本さんが一人で原稿を書かれたのです」と話し、当時の岡本が服部の影響を受けるとは考えにくいと語る背景には、このような状況もあったようである。

また、大西雅雄との関係については、1943年から1944年にかけて、嘱託として国際学友会に来ていた金田一春彦氏が「大西さんと岡本さんは犬と猿の間柄でした」と話している。「大西さんは純粋な日本語の漢字や仮名遣いを絶対に守らなければならないという考えで、これを壊そうとするの

は国体を壊そうとすることだという考えに凝り固まっているのです。岡本さんの方は日本語を外に広めるためには、もっと易しくしなければならぬという考えで、できれば漢字もやめて仮名だけにしたい、ローマ字でもいいという気持ちなんです。合うわけがありません」という話だが、二人がそれぞれ当時の雑誌に発表している文章からも、その傾向はうかがえる。

金田一春彦氏、松村明氏、水野清氏、中村愛子氏ら当時の岡本を知る人々の語るところによると、当時の岡本像は次のようにまとめられる。

岡本はカナモジカイの松阪忠則などとも親しく、漢字制限や表音式仮名遣いや左縦書きなどを提唱する国語改革論者であった。外国人も含めた誰にでもわかりやすい日本語を理想とする一方で、世界共通語となるべきなのは 에스ペラント語 であると考えていた。いわゆる日本主義とは正反対のリベラリストで、学生にも、自由な発言を促した。

この岡本の影響で国際学友会の雰囲気は自由なもので、日本じゅうが戦争一色に染まる中にも、ここだけは別天地のような様相を呈していたとは、証言者のだれもが異口同音に語るところである。

一方日本主義を唱える大西には、それが気に入らず、時に激しく岡本を非難していた、と金田一氏は述懐している。当時の大西の肩書きは「駒沢大学教授」であるが、国際学友会では数人を率いて一室に籠り、「語彙調査」を行っていたという。高橋一夫1968によると、「国際学友会には日本語学校のはかに辞典編集部というのがあって、かなりの組織で仕事をしてきたようである。(中略)日タイ辞典を当面の目標としているとかきいた。その基礎調査として大規模な語彙調査が進められていたのだが、その長が大西博士であった」とある。昭和17年1月の国際学友会月次報告によると、同年1月6日付で辞書編纂嘱託として大西雅雄が任命され、この年はこの辞書編纂の部門にはかに11名が漸次任命されている。同会昭和17年度の事業報告書によると、「辞書編纂」という見出しのもとに「昭和17年度ハ前年度ニ引続キ語彙調査ニ終始シタルトコロ、ソノ採録語彙約百八十萬語ニ達シタリ。昭和18年度ニ於テハ、主トシテ語彙整理完了ノ予定ナリ」

と書かれている。

しかし、結局この仕事はまとまった成果を出すに至らなかった、と金田氏は語っている。一方、岡本のもとにいて日本語教育に直接尽力していた松村明氏によると「〔語彙調査〕の関係者は）私どもの仕事には一切関わりがなく、昼休みなどでも全く別行動。……どういふわけか全くの秘密主義で私どもにはどういふことをやっていたのか全くわかりませんでした」といふ。岡本と大西はいわば冷戦状態にあつたらしい。

以上のことから、岡本が大西の影響を受けたといふのも考えにくく、『日本語教科書 基礎編』の執筆には服部四郎、大西雅雄の影響を特に考へる必要はなく、岡本が単独に執筆したものと結論づけられる。

1941（昭和16）年2月の『コトバ』第3巻第2号には「国際学友会（編）『日本語教科書』基礎編 菊83ぺ、価1.80、国際学友会、発音、基本文型、文法など、岡本千万太郎氏の努力（p. 91）」とあり、「国際学友会の日本語教科書出版」といふ小見出しの記事に「昭和15年度の出版として『日本語教科書』基礎編（既に発行）巻一、二を出版、引き続き巻二から五まで、日本語副読本各種、日本語文法教科書、漢字教科書、日本語簡易辞書、基礎日本語の調査（他の発表されたものを参考として新に資料を蒐める）なども将来行ふ予定である由（p. 90）」と書かれている。岡本は『コトバ』の同人であるから、この記事は岡本が自らの構想を報告したものであろう。

岡本は続く出版物の共同執筆者を求めた。一人は横須賀高等女学校時代の同僚、武宮りえ、もう一人は母校東京帝国大学の後輩、松村明である。

以下の教科書はこの三人によって執筆されることになる。

その傍ら、岡本は雑誌などで日本語や日本語教育に関する発言を行い、1942年9月に『日本語教育と日本語問題』を出版、同10月に『現代日本語の研究』（白水社）を出版している。後者は、岡本が東京帝国大学の橋本進吉門下の学者たちに現代語に関する論文を募つてまとめたものであるが、現代語の論文集といふのは当時類を見ず、画期的なものであつた。岡本が巻頭論文「日本語の理想と日本語学の体系」を書き、その他、亀井孝、金

田一春彦ら11名が岡本の呼び掛けに応じており、学友会からは他に松村明が「主格表現における助詞『が』と『は』の問題」を、林和比古が「形容動詞の語幹用法について」を書いている。この論文集は「国語学振興会」によるもので「代表岡本千万太郎」と記されているが、この国語学振興会という団体名は、岡本がこの時に名付けた実体のないものであった。松村明氏は、「岡本さんはこの名前で、現代語関係の研究書を次々出そうと思っていらっしやったんでしょが、結局これ一つきりで終わりました」と語っている。

岡本は国際学友会主任教授として、現代語研究を推進しつつ、国際学友会から『日本語教科書』以外にも「日本語副読本各種、日本語文法教科書、日本語簡易辞書」なども出版しようと構想を持っていたのである。そして、1939年から1942年にかけて、精力的にその構想を実践していったのだ。

しかし、それは頓挫してしまう。岡本は1943年の夏ごろ、突然のように北京師範大学に赴くのである。この時期、いよいよ戦時色が濃くなって、1942年11月には国際学友会の所管が大東亜省に移り、やがて、その指揮のもとに南方特別留学生を大量に受け入れるようになってゆくのだが、岡本が姿を消すのはこの国際学友会が変質してゆく時期と符合している。

『コトバ』では1943年7月の第5巻第7号まで裏表紙の同人名簿に横浜市 の住所で載っていたのが翌月の第8号では突然「地方委員（北支）岡本千万太郎」と書かれるのみで、同人の消息欄などにも、その異動について何も報告されていない。『日本語』誌上では1943年の半ばより岡本の名前が消え、1944年3月号の彙報に突然「2月15日現在現地日本語教育事情に関し、日本語教育振興会と連絡懇談されし方々」の中に「岡本千万太郎（北京師範大教授）」とその名を現すのである。

このいかにも不自然な転出について、金田一春彦氏はその顛末を、「(戦時という特殊な)世の中には妙なことが起こり得るものだといういい例」として、筆者に語ってくださった。その複雑な経緯は省略するが、要するに、リベラリストであり、日本語改革論者であった岡本は時局に合わず、

これを良からず思う力によって、転出を命じられたのであったという。

管見の及ぶ限り岡本は、以後敗戦まで国内の雑誌には一度も寄稿していない。

3-2. 『日本語教科書』の編者と執筆の具体的状況

3-2-1. 「基礎編」

以上に述べたように、「基礎編」は1939年の4月に国際学友会主任教授に就任した岡本千万太郎が、その直後から単独で執筆したものである。実際に教壇に立って、留学生に教えながら、岡本はかねてから諸雑誌に発表してきた持論を、実践に移すべく、意欲的に取り組んだものと思われる。

1940年の4月に着任した松村明氏の談話によると、氏が着任した時、既に「基礎編」の原稿はほとんどできていたということである。松村氏は校正を手伝い、最終的な表記法や分ち書きの仕方についての話し合いに参加し、決定した。そして、これはこの年の12月に発行される。

3-2-2. 「巻一」～「巻五」

「巻一～五」には、岡本がそのために招いた武宮りえと松村明がその執筆者として加わることとなる。この二人も岡本と同様、実際に留学生に教えながら、教科書の執筆を行った。

武宮りえは京都の専門学校で国文学を学び、横須賀高等女学校の国語の教師として岡本の同僚であった人物で、松村明は、岡本が母校東京帝国大学文学部の久松潜一に卒業生の一人を紹介するよう依頼したことから、久松に声をかけられたものであった。当時、国語学といえは古い時代の日本語を対象とする人が多かったが、松村明氏は「専門が江戸ことばで、比較的新しいことをやっていたので、私が呼ばれたわけです」と話された。

当時、ほかにも教師はいいたのだが（資料2参照）、教科書を執筆するのは国文学や国語学を専門に勉強した者に限ると岡本は考えたようである。

いよいよ三人による『日本語教科書』編集の仕事が始まった。特に参考

にした文献はなかったという。岡本の構想のもとに、執筆者らの話し合いで方針を決めて書き進めていったということである。

「巻一」から「巻五」は読本形式だが、「巻一」には、本文の後に「問い」と「言い方」がある。前者は本文の内容に関する設問、後者は学習項目として抜き出された文型や文法の手引きが提示されているものである。「巻二」にも「練習」として「言い方」に準ずるものが挙げられている。

教科書作成については基本的にその三人が共同で行うのだが、実際は「巻一と二は国語学の私（松村）、巻三・四・五は国文学の方の専門の武宮さんが主にやるようなことになった」ということである。岡本が全体のまとめ役であった。松村氏は「巻一と二は分かち書きで、本文のあとに基本文型が出ているでしょう。こういうのは私が書きました。新しく書いた本文もあるし、国定教科書からとったものもありますが、何をどうとるかは日本語としての難しさを考えて並べなければならないでしょう。そして練習する文を抜き出します。……特に巻一と二は、体裁を整え整理したのは私です」と、話している。

「巻一」から「巻三」には書き下ろし本文が多い。書き下ろしでないものは小学国語読本からとられているものがほとんどである。『日本語教科書』ができるまで、国際学友会では日本語教材として、この『小学国語読本巻1～12』を使っていた。「サイタ サイタ サクラガ サイタ」で始まる第4期サクラ読本と呼ばれているものである。

「巻四」「巻五」には書き下ろし本文はなく、いろんな一般の書物から、選ばれた文章が並べられている。教科書のない時代は『小学国語読本』のあとには岩波書店版の中学校用国語教科書『国語』（巻1～10）を使用していたが、内容を見ると、特に、直接的な影響はないようである。

「巻四」までの編纂が終了し、「巻四」が1942年11月に発行されて間もない12月、松村明は軍隊に招集される。「巻五」はその間に編纂されたので松村はほとんど関わっていない。また、既に述べたように、1943年の夏には、岡本は北京師範大学に教授として赴いているから、「巻五」の最後は

武宮りえ一人の手に委ねられるほかなかったものと思われる。

国際学友会は1942年11月にその所管が大東亜省に移り、外務省の役人に代わって軍人が上層部をしきるようになり、大きな変化を遂げることとなる。この頃は紙も逼迫し、印刷所も正常に機能せず、「巻五」は実際には奥付の日付である1943年4月よりやや遅れて、発行されたようである。

「基礎編」の編集が始まった1939年から5年足らずの年月で、ともかくも当初の予定どおり『日本語教科書』全六冊は完成した。しかし、時代は大きく傾き、国際学友会の仕事にも戦争の影が色濃く投影されるようになるのである。そんな中で1943年1月、国際学友会の日本語教育部門は各種学校として認可され国際学友会日本語学校となり、1943年、1944年と大量の南方特別留学生を受入れ、規模は急に拡大するが、それも東の間、1944年12月には留日学生非常措置要項が決定されて留学生は地方に分散させられる。国際学友会は東京在留の12名の学生に敗戦直前まで授業を行うが、敗戦でついに在校生がいなくなり、廃校を余儀無くされるのである。

3-3. 『日本語教科書』の表記と『重要五百漢字とその熟字』の編纂

『日本語教科書』は当時の日本語事情を反映して、表記にはことさら細かい配慮がなされている。

まず、「基礎編」だが、その表記には次のような特色がある。

- ① 当時としては珍しい横書きである。
- ② 当時一般に行われていた仮名遣いは用いず、表音式の片仮名で書かれている。
- ③ 品詞ごとに細かく分かち書きされている。

「第一部(発音)の使い方」に「この第一部ではかたかなを発音の通りに使っています。いわゆる仮名遣いは、この編とは別に次の本から教えてください」とある通り、教科書に記された片仮名は、当時の仮名遣いに従わず発音記号に相当する扱いであり(助詞の「は・へ・を」も「ワ・エ・オ」と表記する)、提出される語彙にはアクセント記号も付されている。

「第二部（聞き方話し方と基礎文型）の使い方」にも表記について「これは音声記号やローマ字で書いてもよいくらいですから、仮名遣いも発音の通りにしました。教える人はそのつもりで、これを普通の仮名遣いだと思わないようによく気をつけてください。いわゆる仮名遣いは、この次の本から始めるのです」とある。読みやすさを考えて上記引用部分の表記は改めたが、原文ではこれも、表音式かたかな・分かち書きで記されている。

その著書『国語観』（1939）、『日本語教育と日本語問題』（1942）などで繰り返し岡本が主張する表記法は「漢字を整理して、その数を減らすこと」「仮名遣いは表音式に改めること」で、これは戦後の著書『日本語の批判的考察』（1954）で「敗戦の後、日本語、特に文章と表記法がわたしたちの熱望した方向に大きな改革をとげた（p. 5）」とある通りのものであった。ただし、岡本はそれに至るまでに様々な方法を試みている。例えば、『国語観』の前書きでは和語については歴史的仮名遣いを使って、字音語のほかには漢字を使わず、その代わりに読みやすくするために片仮名を交ぜて使うという方法を試み、『日本語教育と日本語問題』所収の論文の半数程度のものには助詞の「は」「へ」「を」はそのままながら、それ以外は徹底した表音式仮名遣いに行っている。また、縦書きも左から書くことを持論としていた岡本は、私信でそれを実践することもあり、当時の岡本を知る人々にはよく知られていたようである。

しかし、岡本がその持論を『日本語教科書』で展開しようとしたと解釈するのは当たらない。岡本の教科書は、最終的には当時の一般の表記法を習得させるのが目標で、そこに至るまでを、いかにわかりやすく合理的に導いてゆくかに腐心していた様子が読み取れるのである。

あとに続く『日本語教科書巻一～五』は縦書きになり、仮名遣いは、「巻一」から「巻四」までは①和語は歴史的仮名遣い、②字音は発音式（臨時国語調査会案による）、③促音・拗音は小書き、という形になる。「巻五」は①②はそのままで、促音・拗音の小書きをやめる。字音語は発音式仮名遣いといっても、新出漢字が「巻一」で 150、「巻二」で 300、「巻三」で

300,「巻四」で300,「巻五」で400と提出されて累積されてゆくから、「巻五」になると、字音語が仮名で表れることはほとんどなくなるのである。結果的に、「基礎編」から「巻五」に至る過程で徐々に当時の一般的な表記に近づくように設定されているのがわかる。

漢字の提出にも配慮がゆきとどいており、計画的にその数を増やしてゆくことはもちろん、振り仮名を音読みは片仮名、訓読みは平仮名で示し、欄外に新出漢字だけでなく読み替えの漢字も括弧をつけて提出している。

漢字については、1941(昭和16)年に『重要五百漢字とその熟字』も刊行されている。「これはカナモジカイの漢字五百制限案の五百字を借りたもので……その音訓やオクリガナ法を教え、またその熟字のうち代表的なものをあげた(注7)」ものだが、実際の執筆は松村明一人に任された。松村はカナモジカイの機関誌「カナノヒカリ」1941(昭和16)年6月号に「外国人学生ノ漢字書取能力」と題して調査報告もしている。

片仮名漢字交じり文と平仮名漢字交じり文とのバランスにも配慮がみられる。「巻一」は片仮名が主で終わりの方の本文に平仮名が初めて出てくるが、「巻二」からは平仮名が本体で、しかし「カタカナを忘れないように」といくつか片仮名の課を加えている。

この教科書の表記のもうひとつの特色は「品詞ごとの細かい分かち書き」である。ここでいう品詞とは、いわゆる国文法のそれとあってよいもので、例えば「ベンキョオ オ スル トキ ニ ワ イ ッ シ ョ ウ ケン メ イ ニ シ ナ ケ レ バ ナ ラ ナ イ (『基礎編』p. 81)」という具合である。

これは「巻一」では、そのまま踏襲されており、前書きに「全文を分かち書きにしたのは、単語や語法の意識をはっきりさせ、辞書をひくにも便利なためです」と書かれている。「巻二」「巻三」では接頭辞・接尾辞・動詞につく助動詞は続けて書くことになり、「巻四」「巻五」では分かち書きはやめて、通常の句読点のみになる。

真下三郎「日本語教科書と分別書き方」(『日本語』第一巻第六号・1941

年8月 p. 33~38)によると、当時、日本語教科書の分かち書きには三種類あり、第一は関東局教科書編集部の『初等日本語読本』の型で、これは文部省の小学国語読本の最初の4巻と一致し、第二は国際学友会の『日本語教科書』の型、第三は東亜同文会の『日本語教科用ハナシコトバ』の型である、とする。真下はこの論考の中で、「(国際学友会のものは)言葉の実際と、意味をあやまりなく諒解せしめる分別書きの本質とからは、やや遠ざかってはいはしないかと思われるのである。とにかくこれは特異な例で、目下のところ、この型に類するものは右以外には一つもない(真下1941, p. 35)」と、批評している。確かに指摘通りの印象はあるが、岡本が言うように、当時の一般の辞書や文法書などを使うには、これが有効だということにも一理はある。

岡本は、現行の表記体系が改まることを熱望し、外国人に使いやすい辞書や文法教科書の編纂も構想していたが、実際の指導では、現状を直視し、現実の表記体系に徐々に慣れ、現実にある辞書や文法書が使えるようにすることが学習者の便宜にかなうと考えたのであろう。

4. 『日本語教科書』の内容

4-1. 基本文型積み上げ型構造シラバスの萌芽

『日本語教科書 基礎編』はその「第二部の使い方」に「ここでは日本語の最も基礎的な『文の型』を主に会話によってのみこませ、日本語の聞き方、話し方の基礎を作ろうとします」と書かれているように、いわゆる文型積み上げ型の構造シラバスを志している。

「基礎編」に続く「巻一」「巻二」には本文のあとに「言い方」があるが、その執筆者、松村明氏はそのお話の中でこれを「文型」という言葉に置き換え、「『文型』は、『基礎編』を土台にして、私が一人で考えて文章から抜き出しました。『言い方』が先にあるということはありません。文章も易しいものから難しい方へ並んでいますが、文章が先にあって、そこから

『言い方』を抜き出して、文型を積み上げていくように道筋をつけたのです」と話された。「基礎編」に続く日本語教科書として、文型を積み上げてゆくことが明確に意識されていたことがわかる。

雑誌『コトバ』で「日本語の基本文型」という特集が組まれたのは1941（昭和16）年2月のことである。三尾砂、佐久間鼎、垣内松三、安藤正次、松尾捨次郎ら、国語関係の学者たちが「基本文型」について盛んに議論している。1942年に出版される青年文化協会『日本語基本文型』の主たる著者である興水実もこの議論に加わっている。この号の編集後記には「基本文型の問題は本誌 新たに注意を喚起せんとする問題である。……我々はこの問題をぐんぐん進めなければならない（p. 84）」と記されている。

この号で岡本千太郎は「基本文型とその種類については、私には以前から大体決まった考えがあり、その大体は『国語教育』に昭和15年の2月から4回にわたって、発表しましたので今さらここに私の考えだけをのべることもできず…（p. 78～79）」と、やや冷めた構えである。この号の基本文型についての議論は熟していない印象で、その中では岡本は確かに一歩先んじている。1940年に「基礎文型」という言葉を掲げて実践してみせた『日本語教科書 基礎編』は、この点で一つ評価されてよい。

ただし、「基本文型」に関しては、このように学者たちが騒ぎ出す以前から、日本語教育の実践家たちはとうに考えていたことも同時に指摘しておかなければならない。

大出正篤 1941 は、「この文型という語がいつから使われ、誰によって使われはじめたかを筆者は詳にしない」と断りながらも「筆者がこれを使用したのは大正10年ごろだったと思う」と述べ、その考え方を示している。そして同誌2月号の「基本文型」の特集について「非常な期待と非常に喜びをもって向かったにも関わらず、『うん、そうであったか』と言って悟を開く程度のものを握り得なかったのである(註8)」と述べている。大出はこれを「日本内地の方々は或いは言語学的に或いは心理学的に或いは文法学的に日本語の本質を見詰めて根本的なところを掘り下げようとせられ

るに反し、我々は日本語教授の実際に役立つものを早く求めたいというのだから立場が違うのである」と説明し折り合いをつけている風であるが、学者たちの議論がともすれば観念的に過ぎるのに比べて、大出の説ははるかに合理的で説得力がある。「日本語の初歩の話す力をつけるに必要な表現形式は極めて少なくても足りるということ、その少数の基本的な表現形式を巧みに練習すれば案外に早く然も正確に話す力は申し得るということ」という日本語教育現場での実績に基づく考察は、日本語の基本文型を考えるにあたって有効であったと思われる。

岡本の考え方は明らかにこの線上にあった。日本語教育の実際家であると同時に国語学者でもあった岡本は大出に遅れはしたが、「日本国語の本質を見詰めて根本的なところを掘り下げよう」という姿勢とは一線を画していた大出とは違い、日本語という言語の問題としてこれを見詰めながら「基本文型」を考えようとしたのである。

4-2. 書き下ろし本文の特色

編者の書き下ろしは、『巻一』全22編のうちの8編、『巻二』全24編のうちの16編、『巻三』全16編のうち7編が、そのすべてである。書き下ろしでないものは、ほとんどが第4期小学国語読本からとられている。

このことについて松村明氏は次のように語っている。

『巻一』は日本語の基礎段階なので、内容も基本的な子供用の教材でも仕方ないだろう、と。でも、それだけではよくないのである程度の年配の学生に適した書き下ろしの教材も入れてあります。『巻二』は使える文型も増え、表現の仕方も豊かになるので、内容的に学生にあった書き下ろし文を増やそうということで、そう（筆者注：『巻一』より書き下ろしが多く）になりました。そのあとは、日本人用の教科書と同じような内容になっていきます。一般の本から選んであります。書き下ろしの本文も三人が書きました。……手紙や日記のところ、学友会の生活が書いてあるものなどは、三人のうちで一番古い岡本さんが書いたような気がします。」

小学国語読本を典拠とする本文は、昔話（「桃太郎」「鼠の嫁入り」「浦島太郎」「羽衣」）や詩（「富士山」「鉄工場」）などが主で、いかにも子供の生活を描いたものや、戦争に関わる内容のものは避けられていることが指摘できる。また、小学国語読本からとられたものでも「しりとり」の語彙を変えたり、「動物園」のお姉さんを先生に差し替えたり、と留学生への配慮からわずかな改変のなされているものがある。

「巻四」「巻五」は一般の文章からとられているが、「巻四」の「挨拶—世界教育会議開会の辞」は、1938年に開かれた会議での外国人に向けた演説である。また「巻五」の小倉進平「日本語の特質」は『国際学友会昭和13年度夏期日本文化講座講演集』よりとられていることが注目される。

書き下ろし本文からは、外務省の管轄時代の国際学友会についての様々な表情が浮かび上がってくる。それらを

- (1) 初級読み教材としての配慮
- (2) 留学生に対する日本紹介の姿勢
- (3) 本文に描かれる留学生の生活と留学生像

の3つに整理して、それぞれの観点から、周辺の資料や当時の教員たちの証言を照らしながら述べてみたい。

4-2-1. 初級読み教材としての配慮

「巻一」は、「基礎編」が終わってすぐの段階で使用するもので、その1課の「アサ」は、「基礎文型」を一通り習ったのち、それを運用して書かれた初めての文章である。

「ヨ ガ アケ マシ タ。 ヒガシ ノ ソラ ガ アカルク ナリ マシ タ」で始まり、「ワタクシ ハ オキ テ、 カホ ラ アラヒ マシ タ。 ソレカラ アサゴハン ラ タベ マシ タ。」と、ある日の朝の行動の学校に着くまでを順に述べていく。

そして「九ジ カラ ジュギョウ ガ ハジマリ マス」とあって、先生の言葉が続く。「サア、 ハジメ マセ ウ。 ……コノ 本 ノ 一ペイ

ジ ヲ アケ テ クダサイ」

最初の文章にふさわしく、直接法の授業で毎日使われるいわゆる教室言葉の導入と、確実に毎日行われる行為を日本語で表現すること、そして問答の練習をすることなどが意識されているのがわかる。

二課の「日本 ノ チズ」は基本文型の中でも初歩的なものを多用した会話体を使って日本に関する基礎知識の紹介をしている点で、ある程度の年齢に達した留学生に対する日本語教材らしい工夫が見られる。

「コレ ハ ナン デス カ。」

「ソレ ハ チズ デス。」

「コレ ハ ドコ ノ チズ デス カ。」

「ソレ ハ 日本 ノ チズ デス。」

「日本 ハ ドコ ニ アリ マス カ。」

「日本 ハ アジア ノ 東 ノ ウミ ニ アリ マス。」

「日本 ハ 大キイ クニ デス カ。」

「イイエ、日本 ハ 小サイ クニ デス。サウシテ、タクサン ノ
ジマ ト ーツ ノ ハントウ カラ デキ テ キ マス。」

に始まり、以下、先生らしいこの人物が、地図を指しながら、「基礎編」の初めの方に扱われている基本文型をふんだんに扱いながら説明してゆく。

「これは何ですか」という文は、ここでは、名詞文の基本を理解させる、ということ以外に一つの教室用語の紹介であるとも理解される。今日の絵パネルにあたるものとして、当時は掛け図が使われていたが(注9)、特に初歩段階の直接法の授業では、掛け図や写真、実物を使って説明したり、会話の練習をしたりすることが多いのである。「これは何ですか」を使った問答も「これ」と「それ」の間答における対応なども「基礎編」で練習済みではあるが、ここではそれらが掛け図を使った授業で生かされていく様子を垣間見ることができるようである。

「巻1」の初めの2課はこのように、いかにも「基礎編」の中でも前半に扱われた基本文型を使い、初級日本語教材であることを意識された易し

い日本語による書き下ろしだが、そのあとはしばらく小学国語読本からとられた教材が日本語の易しいものから並べられ、「文型積み上げ」教材としての構成は松村明の執筆による「言い方」が担うような形になっている。

4-2-2. 留学生に対する日本紹介の姿勢

初めに述べたように、国際学友会には、中国を除く世界の広い範囲からの留学生が学んでいた。当時、国家的に推進されていた日本語普及はアジア太平洋地域のいわゆる占領地に向けられていたわけだが、国際学友会には、それ以外の地域から自ら進んで日本へ研究に来た留学生もいたのである。『日本語教科書』は、どの地域から来た留学生に対しても公平に使われるべく作成されている。

共通して与えられる内容として日本の紹介は適切であるが、その大半は同じ主題が小学国語読本などにもあるにも関わらず、ほとんど編者による書き下ろしである。「雛祭り」や「鯉戦」「国旗」などがそれである。

これらは、日本人の子供たちのために書かれたものがそのまま使えない教材の典型例であるから、書き下ろしになるのが当然ではある。しかし、それではどのように紹介するか、というところに編者の姿勢が表れる。「雛祭り」「鯉戦」については、その行事について、客観的に簡単に紹介している形だが、「国旗」や「国歌『君が代』」については、その紹介の仕方が日本の子供向けであってさえ、その時代の国家体制によってずいぶん変わるものである。ここでは「国旗」を例に述べてみる。

「国旗」は日本の小学校の修身の教科書に明治時代から扱われており、第4期（1934年～1939年）・第5期（1941年～1943年）の修身教科書にもこれを扱う文章がある。だが、第4期のものには「我ら日本人は日の丸の旗を大切にしなければなりません。また礼儀を知る国民としては外国の国旗もさうたうにうやまはなければなりません(注10)」というくだりが見えるのに対し、第5期のものは「敵軍をおいはらって、せんりょうしたところに、まっさきに高く立てるのは、やはり日の丸の旗です。(注11)」といった

軍国主義的内容に変わっているのである。

国際学友会の教科書の「国旗」は「巻二」の巻頭である。第五期の教科書とほぼ同時期に出版されているが、その内容の違いは顕著である。

国旗の意味を白は日本人のきれいな好きで平和を愛する心、中央の赤は熱心とか真心、と説明したあとで、「正義のために奮い立ち、天皇陛下のために命を捨てて働く心が真心です。しかし、このような精神は非常の場合に表すべきものです。ふだんは平和で真心を奥の方にかくしていますから、赤い日の丸を平和の白で包んであるのです」と述べる。そのあと、日本では個人の家でも国旗を立てる習慣があって欧米人に珍しがられる、と紹介し、最後には「各国の選手が集まって競技をする時にも勝った国の旗が高く上げられます。こういうときには誰でも自分の国を愛する心で胸がいっぱいになります」といって締め括るのである。

同じ視点は「巻一」の「国歌『君が代』」にも見られる。「君が代」の歌詞の解説のあと一般論に移り、「外国で自分の国の国歌を聞く時は特別に嬉しくて思わず涙が出るそうです。これはどの国の人もみんな同じでしょう」と続く。教室で学生に語りかける調子が、そのままかがえるようである。

「国際学友会は元来外務省の団体で、いろいろな国と仲良くしていこう、いろいろな国の人々に日本を理解してもらおう、しかし押しつけるんじゃない、という姿勢がはっきりしていました。」と松村明氏が述懐するとおり、平和な文化的交流をめざした内容であるのは注目される。大東亜共栄圏の共通語として日本語教育が積極的に押し進められる時代の勢いにおいて、国際学友会は本来自ら希望して日本へ勉強のためにやってきた留学生、それも文字通り全世界からやってきた学生たちを相手にしていたのであるから、事情は違って当然であった。中村愛子氏、水野清氏は、国際学友会の中では、学生の出身地が占領地であっても、独立国のように扱い、その民族を尊重する姿勢をとっていたことを、口々に語っている。

その中において、「天皇陛下のために……」という記述は、ぎりぎりの

譲歩として書かれたのではなかったかと推測する。岡本はほかの論文にも目立つところに時局におもねるような言葉を記すことがあり、時代を隔てて読む者を惑わせる。しかし、これは当時の事情を差し引いて読むべきであろう。この時代を生き抜くためには保身も必要であった。一人の力で抵抗するには余りにも大きな力が国全体を支配していた。岡本は敢えて時代に挑む行動にこそ出なかったものの、時局に合わせて自分を変えることもしなかったのである。そうでなければ、そのリベラルな思想が時局に合わないことを理由に学友会を去らなければならなかった岡本の不幸を理解することはできない。

4-2-3. 本文に描かれる留学生の生活と留学生像

『日本語教科書』の書き下ろし本文には、留学生が多く登場する。国際学友会での生活もそのまま本文に描かれており、当時の留学生の生活と、それを見守る教師たちの姿勢が映されているのは興味深い。

「巻一」には国際学友会のタイの学生が国の恩師へ日本での生活を報告する「手紙—先生へ」、また夏休みに実際に行われた国際学友会の三保保健寮での夏期授業のことを綴った「日記」、 「巻二」には、フィリピンの留学生が友人と博物館へいく約束をする「電話」、留学生の一人称による「日曜日の朝」、国際学友会のインドネシアの留学生が日本人の家庭を訪問する「お客様と紹介状」、ビルマの留学生と日本人との往復書簡「招待状と返事」があり、「郵便」「入学試験」も留学生が主人公で留学生の立場に立った文章である。「巻三」には国際学友会で世界各国の学生たちと友達になれることはすばらしいという内容の「友達」、国際学友会で実際に行われていたスキー旅行を題材にした「スキー旅行」、ブラジル、イタリア、安南（ベトナム）の留学生と日本人学生が海外放送や時差の問題について話し合う「海外放送」、そして国際学友会で開かれたタイ・ビルマ・インドの留学生の送別会の実況記録のような内容の「送別会」がある。

これらを読むと、当時の生き生きとした留学生の生活が目に見えるよう

である。登場する留学生の名前のほとんどが、学籍簿に残っている実際の学生の名前と一致するのも微笑ましい。

国際学友会の留学生は、一般の日本人よりも豊かな生活環境を保証され、日本人の学校のように教育勅語などにも捕らわれることなく、自由に発言し、教師たちと心の通い合いを楽しんでいた、と当時の証言者は口を揃える。「学友会は外務省の外郭団体だったでしょう。外務省の人達は自分も留学したことのある人が多くて、留学したらどんな思いをするかわかっていたのでしょ。だから十分なお世話をしたのだと思いますよ」とは、中村愛子氏の話である。

5. 『日本語教科書』はいかに使われたか

5-1. 国際学友会での使用状況

『日本語教科書』ができる前には小学国語読本や岩波の中学校用「国語」などを使っていた国際学友会の日本語教育だが、できた順に『日本語教科書』の使用に切り替えていったことは言うまでもない。ただし、この教科書だけを使っていたわけではない。

岡本の「留学生の国語教育」(1942)によると、以前からハナシコトバを教えるためにプリントなどの教材も併用していたという。『日本語教科書』は、この時完成していた「巻二」までを使い始めており、『重要五百漢字とその熟字』を使った漢字の授業も始めている。漢字は、教科書に学問的な字音語をとり入れたが、それでも足りないので、「中等学校の理科系統の教科書、たとえば物理学・科学・数学などの教科書をも教え、かれらの入学試験や入学後の便宜に備えている(注12)」とある。そして、将来は「巻五」までを完成させ、「そのほかの教科書もやりながら」『日本語教科書』全編を一年で終えさせようと考えていると述べている。また、教え方は始めから日本語だけで行う直接法だが、時により英語で説明することもある、とも述べている。

『日本語』第3巻第4号(1943年4月)の「日本語教授三月一泰国招致学生の学習状況」(国際学友会)によると、毎日午前の一時間を「読解(文法)」、一時間を「会話」にあて、午後の一時間に「副読本・作文・習字」を学習することになっており、その「読解(文法)」に使用されるのが『日本語教科書』の「基礎編」と「巻一」である。「基礎編」を10月1日から11月4日までで終え、『巻一』を11月5日から12月24日で終えている。並行してその同じ期間に日本語教育振興会の中国向け教材『ハナシコトバ上・中・下』『日本語読本巻一』、そして国民学校用の『ヨミカタ巻一』『コトバノオケイコ巻一』を終了し、『日本語読本巻二』『ヨミカタ巻二』『コトバノオケイコ巻二』を12月の初めから使い始めている。

本文によるとこの報告書の書かれたのは1月の末であり、「12月の29日から1月5日までの休には、教科書で教えた日記文と手紙文の応用として、日記三日分と日本の様子を知らせる手紙を宿題にした」とあり、それが原文のまま紹介されている。これを見ると三か月で着実な成果をあげていて、教師、学生双方の努力がしのばれる。

この学生たちは「教え年16・7歳」と若く、「泰国の文部省と在泰日本大使館の学術試験・人物試験・健康診断に合格して選抜せられた」という秀才ぞろいで、条件は極めてよいため、学習時間は最短と考えてもよさそうであるが、それにしても全く初めての状態から1か月で「基礎編」を終える、というのは、今日目で見ると驚くべきものがある。「基礎編」はいわゆる今日初級の文型と呼ばれる内容のほとんどが受け身・使役に至るまで一通り、扱われており、今日ではこれらを含むいわゆる初級は一般に300時間を要する(日本語能力試験3級の基準による)とされている。およそ3か月は必要である。おそらくはこの時点では運用力までは要求せず、「巻一」以降で復習しながら定着させてゆくものと思われる。

当時の教師の証言の中で興味深いことの一つに「基礎編」は国語学の専門家以外の教師は担当しなかった、ということがある。津田英学塾の出身で英語の専門家であった中村愛子氏は、「本当の基礎は私のような英語の

専門家にはやらせてもらえなかった覚えがあります。基礎は学問的・理論的専門性が高いから国語の専門の先生がやるという考え方でした。……男の先生と私が組むと、男の先生が文法など骨組みをなさって、私はプラクティスの方を担当するのです」と語り、この内容については、松村明氏も「それは岡本さんの方針でした」と認めている。

「基礎編」「巻一」「巻二」は必ず順に使われ、「巻三」「巻四」は、時にはいくつかを選んで使われることもあったようである。しかし、「巻五」はほとんど使われた形跡がない。

5-2. 国際学友会以外での使用状況

『日本語教科書』は、内部使用のためだけに作成されたのではない。その前書きを見ると、広く外部で使用されることも意識されており、実際外部に向けて市販された。たとえば、国際学友会昭和17年度の事業報告書には、「タイ国バンコック日本語学校及在仏印日本大使館ヨリ（本会編纂発行ノ教科書）大量ノ注文アリタリ」と記され、それを受けるような記述を日本語教育振興会『日本語』に見ることができる。

『日本語』1943年8月（第3巻第8号）に「盤谷第一日本語学校」の教材として「日本語教育振興会『ハナシコトバ』と鈴木榮（ママ）編纂の『日本語の基礎』、国際学友会の『日本語教科書 巻一』そのあと、国定教科書巻六・七」が使われたとある。鈴木忍は国際学友会から赴いているので、学友会の教科書を使うことは理解されるが、「巻四」までは既に出ていたのに「巻一」しか使わず、「基礎編」を使わずに、自身の編纂による『日本語の基礎』を使っていたという点は注目される。

また、同じく『日本語』1943年9月（第3巻第9号）には「仏印の河内」の北部仏印日本語普及会の教材として、「国際学友会『日本語教科書基礎編』『同巻一・二・三』より適宜選択して」使われたとある。

『第二次大戦前・戦時期の日本語教育関係文献目録』（日本語教育史研究会 1993）によると、中国の東北師範大学図書館に国際学友会の『日本語

教科書巻一・三・四・五』が所蔵されている。これは岡本千夫太郎が中国へ持っていったものかと推察される。志半ばで突然北京師範大学に赴任することになった岡本が、自身の手になる教科書を携えていき、現地で使った可能性もある。

いずれも敗戦までの短い期間でのことであった。

5-3. 戦後の国際学友会の教科書への影響

1945年の12月、ついに学生数がゼロとなり廃校に追い込まれた国際学友会日本語学校だったが、戦後処理もあって事務部門だけは存続した。やがて、再び日本に留学生が来るようになり、1951年6月には日本語教育を再開、1953年には鈴木忍・阪田雪子による教科書の編纂が始まる。

この時作られた一連の教科書は、版を重ねて国の内外で広く使われ、国際学友会の教科書として最もよく知られているものである。

戦後の混乱を経て、国際学友会は狭い所へ移り、戦争中のものの多くが処分されてしまった。阪田雪子氏の東京外国語大学定年退官に際しての最終講義の筆記録によると「(教科書は)何もない、学生は来る……その教科書をどうするかということで、ともかくも早く教科書を作らなければならないということになりましたが……戦争中に学友会の教科書というのはあったことはありました。けれども内容的にそれは全く使いものにならないものでした。また、長沼読本は学習者の目的が違いますから、そのまま使うわけにはいかない、というようなことでやはり独自のものを作らなければならないということになりました」とある。「戦争中に…」のくだけりを除けば、戦前と同じことが繰り返されている印象を受ける。『日本語教科書』の作成の時も、同じ理由で長沼の教科書は参考にしなかった、と松村明氏が語っている。

筆者が別に阪田雪子氏に直接うかがったところでは(註13)、「基礎編」の存在は当時ご存じなく、鈴木忍も一度もこれには触れなかったそうである。『NIHONGO NO HANASHIKATA』は、主に国際文化振興会から出さ

れた『日本語表現文典』や『日本語基本語彙』を参考に書かれたという。

「基礎編」は基本文型を積み上げることが意図されながら、特に後半については岡本自身もその完成度に問題のあることを認めているように、熟さぬところがあり、岡本自身がそこから離れて新たな体系を作り出そうとしながらも、従来の国文法の術語に捕らわれている面が拭い難くある。

基本文型のバイブル的存在である青年文化協会の『日本語基本文型』が世に出たのは1942年、国際文化振興会の『日本語表現文典』は1944年で、岡本の「基礎編」はそれより早かった。

鈴木忍がバンコクで「基礎編」を使わず、自身の編纂による『日本語の基礎』を使っていたことが想起される。戦前の国際学友会で、教科書の編纂に関わること無く、教えることに専心していた鈴木忍は、現場で「基礎編」に不満を感じ、独自の教科書を構想したのかもしれない。

一方『日本語教科書巻一～五』については、その表記法が戦後大きく変わったことから、そのままでは「使い物にならな」かったわけだが、内容的には十分に使えるものもあり、その一部は戦後の『日本語読本』に受け継がれている。影響関係の指摘できるものをいくつか挙げておく。

『日本語読本巻一』（1954年）の「雛祭り」「鯉幟」は、『日本語教科書巻一』の同じ題のもと文章の一部が同じで、文章の展開にも共通性がある。『日本語読本巻二』（1955年）の「浦島太郎」「羽衣」は全く同一で「お月見」もその大半が共通している。「キャンプ生活一日記」も『日本語教科書巻一』の「日記」と、その題材が共通している。『日本語読本巻三』（1955年）では相馬御風の「良寛さま」、芥川龍之介の「くもの糸」、島崎藤村の「椰子の実」が『日本語教科書巻三』と重なっている。「送別会」は国際学友会の留学生の卒業パーティーを描いたものだが、これは固有名詞や内容の一部が変わっているものの文章全体の構成は全く『日本語教科書巻三』のものが踏襲されている。『日本語読本巻四』（1955年）では北原白秋の「落葉松」、森鷗外の「山椒太夫」、芳賀矢一「身体に関する言い回し」が共通している。

戦後も引き継がれた作品には、小学国語読本のものや文学作品もあるが、日本の文化を紹介する編者の書き下ろしや、国際学友会の留学生を主人公にしたものがあることは、注目されて良い。

敗戦を機に日本語教育は一度壊滅状態になり、しばらくの空白期間を経て戦後の新しい日本語教育が始まるのだが、『日本語教科書』の編者の留学生に日本文化を紹介する姿勢は時代の大きな変化を超えて生き延び、また留学生の「送別会」は戦前も戦後もその本質に変わりはなく、同じ精神を持って受け継がれ得るものであったことを、ここにはっきりと見ることができるからである。

6. おわりに

本稿でとりあげた国際学友会編『日本語教科書』および岡本千万太郎の著書など当時の日本語教育関係の文献は、関正昭『日本語教育史』(1991)では「戦前戦時中の日本語教育は二度と繰り返してはならない忌まわしい日本語教育であったが、教授法・教材開発の面からは多くの成果が得られた時期でもあった(P78)」と括った中に紹介されている。

「忌まわしい日本語教育」とは何だろう、という問いは、筆者の頭を離れない。少なくとも本稿で論じた『日本語教科書』の「基礎編」から「巻四」の編纂当時の国際学友会の仕事を「忌まわしい」ものと呼ぶことは、筆者にはできない。しかし、1943年の夏、大東亜省の指揮下に南方特別留学生を大量に受入れることになったという事実は、どうだろうか。

1914年に松本亀次郎がその私財と寄付によって創設した東亜高等予備学校も、関東大震災で焼失して財政がいきづまり、1925年に政府補助金で運営されていた日華学会に合併譲渡されるが、やがて松本は老齢で退き、日中戦争に入った1937年以降は、国策に沿って日本軍の占領地区からしか留学生が来日できなくなる、という事態を招いた。

創設者松本亀次郎は「中華留学生教育小史」(1931)において「留学生教育は、何等の求める所もなく、為にする事もなく、至純の精神をもって、

蕩々として能く名づくる無きの大自然的醇化教育を施し、学生は……その卒業して国に帰るや、悠揚迫らざる大国民となり……、内は多年の私争を熄め、外は国際道徳を重んじて、独り日本のみならず、世界各国に対しても陸誼を篤くし、厳然たる一大文化国たるの域に達せしめる^(注14)」ことを留学生教育の理想とし、また「中華教育視察紀要」(1931)の巻末に「予は国家を愛すると同時に、新興民国の新建設に対してその前途を祝福し、永遠に両国家の共存繁栄を祈るのみ外、他意なきことを表明して本篇の終結とする次第である^(注15)」と明言し、これを時の政府関係者を含む各界の人々に贈った。日中関係が緊迫し、その9月には満州事変が起こる、その2か月前のことで、体制追従や保身の気持ちを全く持たず、常に留学生の側に立って考えた松本の面目躍如たる事実である。

この松本の思いから、その後の東亜高等予備学校(1935年に東亜学校と改称)は、あまりにも遠い地点へきていた。やがて、敗戦。東亜学校は永久に消滅してしまう。

外国人との接触の場に生じる日本語教育という仕事は、否応なく時の国家の外交政策や国家間の関係に密接に関わることになり、その影響下に、時には支配下に置かれることになるという宿命をもっている。国家が変質していく時、それにつれて変質を余儀無くされてゆく様は、東亜予備学校だけでなく、本稿に及り上げた国際学友会の歴史の中にも見て取れた。

その時代のすべてを「忌まわしい」ということばで封じてしまうだけでは、「忌まわしさ」の本質は見えてこないような気がする。結果として、「忌まわしい」地点へいとも容易に運ばれてしまう体質に「忌まわしさ」があるとは言えそうであるが、それならば、今日の日本語教育はその「忌まわしさ」から完全に無縁のものと言えるのだろうか。引き続き、考えてゆきたいと思う。

この時代の経験から、我々が学ぶべきことはなお多い。事実を丁寧に検証し、評価すべきを評価し、批判すべきを見極めてゆきたいものである。

本稿は、そうした筆者の研究の一部をまとめたもので、国際学友会『日

本語教科書』については、かなりの部分を明らかにすることができたと思うが、なお不十分な部分もある。御教示など、いただければ幸いである。

お忙しい中、筆者の不躰な訪問を許し、質問にお答え下さり、またお教え下さった中村愛子先生、後藤優美先生、松村明先生、水野清先生、金田一春彦先生に、ここに改めて、謹んでお礼の気持ちを申し述べたく思う。

戦前・戦中の教科書や雑誌の閲覧にあたっては、文教大学越谷図書館に大変お世話になった。合わせて感謝を申し上げたい。

(注1) 国際学友会『日本語教科書』の「基礎編」は国立教育図書館に所蔵されている。その他はかつての国際学友会の関係者の個人蔵のものを見せていただいた。コピーは筆者の手元にある。

(注2) インタビューは筆者が単独で行った。その日付は次の通りである。

中村(旧姓 永鳥)愛子先生 1994年8月3日(水)

後藤(旧姓 大島)優美先生 1994年8月23日(火)

松村 明先生 1995年12月19日(火)・30日(土)

水野 清先生 1996年3月19日(火)

金田一 春彦先生 1996年4月7日(日)

(注3) 新内康子「日本語教科書の系譜—国内機関発行編」(『鹿児島女子大学 研究紀要』第15巻第1号 1993年7月、p36)

(注4) 服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会『現代言語学』1972 三省堂、p749

(注5) 『コトバ』第2巻第11号・1940年11月、p91

(注6) 高橋一夫「戦中戦後あれこれ」(『日本語教育』11号、1968、p6)

(注7) 岡本千太郎『日本語教育と日本語問題』白水社 1942、p52

「カナモジカイの漢字五百制限案」は、同会の雑誌『カナノヒカリ』昭和12年6月の臨時増刊第188号に提出されている。

(注8) 大出正篤「日本語の初歩教授から見た文型の考察」(『コトバ』第3巻第6号・昭和16年6月、p22~30)

(注9) 日本語教育振興会『ハナシコトバ』にも付属教材としての掛け図があった。掛け図を使って授業をしている様子を写した昭和18年の写真が『国際学友会50年史』(1985 口絵)に見える。

(注10) 第4期国定修身教科書 尋常小学修身書巻三(1936)17「国旗」

(注11) 第5期国定修身教科書 初等科修身一(1942)16「日の丸の旗」

- (注12) 岡本千万太郎「留学生の国語教育」『国語文化講座第6巻 国語進出論』
1942年1月、朝日新聞社、p184
- (注13) 1996年3月13日(水)にお会いした折にうかがった。
- (注14) 松本亀次郎は1930年4月から5月にかけて中国教育事情視察旅行をし、その視察に基づいて書いた3編をまとめて翌年7月に『中華五十日遊記・中華教育視察紀要・中華留学生小史』を出版した。
引用は平野日出雄『日中教育のかけ橋松本亀次郎伝』(1982 静岡出版社)
p237より孫引き。
- (注15) 平野1982のp243より孫引き。

参考文献

- 岡本千万太郎『国語統一新日本語の建設』 1939年 白水社
『昭和13年度夏期文化講座講演集』 1939年 国際学友会
岡本千万太郎『日本語教育と日本語問題』 1942年 白水社
岡本千万太郎『日本語の批判的考察』 1954年 白水社
金沢謹『思い出すことなど』 1973年 国際学友会
国際学友会『国際学友会50年史』 1985年 国際学友会
『日本教科書大系 近代編』第3(修身三) 1962年 講談社
『日本教科書大系 近代編』第7(国語四) 1963年 講談社
『日本教科書大系 近代編』第8(国語五) 1964年 講談社
『日本教科書大系 近代編』第16(地理二) 1965年 講談社
平野日出雄『日中教育のかけ橋松本亀次郎伝』 1982年 静岡出版社
関正昭『日本語教育史』 1991年 私家版(第3刷)
木村宗男編『講座日本語教育 15 日本語教育の歴史』 1991年 明治書院
(雑誌)
日本語教育振興会『日本語』(創刊号1941・4～第5巻第1号1945・1)
国語文化研究所『コトバ』(第1巻1号 1939・10～第6巻4号 1944・4、復刊
第1号 1948・2～復刊第2巻12号 1949・12月)
国語協会『国語運動』(第2巻1号 1938・1～第7巻12号 1943・12)
国語研究会『国語教育』(第20巻4号 1935・4～第26巻1号 1941・1)
カナモジカイ『カナノヒカリ』(第188号 1937・6～第216号 1939・9)

資料1 国際学会友編『日本語教科書 基礎編・巻一〜五』の内容一覧

『日本語教科書 基礎編』昭和15年12月

ダイープ ハツオン

ダイープ ノ ツカイカタ

(以下、五十音の1行ごとに1ページを使って、その行の片仮名とそれを使った語を示す。そのあと撥音・濁音・半濁音・促音・拗音・それに外来語音の順に、それぞれの音とそれを含む語を示している。)

オンイン ト カタカナ ノ タイショオヒョオ

ダイニブ キキカタ ハナシカタ ト キソブンケイ

ダイニブ ノ ツカイカタ

1. ……ワ……デス
2. ……ワ……デスカ
3. シュウ (週)
4. カズ (数)
5. ……ガ……デス
6. ……ガ アリマス/……ガ イマス/……デ ワ アリマセン
7. ……ト…… (ト) ……
8. ……ノ……
9. ……ニ……
10. ……エ、……カラ、……マデ
11. ……デ、……オ
12. ……ヨリ 形容詞
13. 副詞、形容詞ノ副詞的用法
14. 係助詞
15. 副助詞、終助詞、間投助詞
16. 接続詞ト接続助詞
17. 動詞、助動詞(-)アイウエオ活用
18. 動詞、助動詞(-)イ・イル・イレ活用
19. 動詞、助動詞(=)エ・エル・エレ活用
20. 動詞、助動詞(ク)クル
21. 動詞、助動詞(ス)スル

『日本語教科書 巻一』昭和16年1月

国歌「君が代」楽譜つき

- | | | |
|----|------------|----------|
| 1 | アサ | 編者作 |
| 2 | 日本 ノ チズ | 編者作 |
| 3 | シリトリ | 小学国語読本巻3 |
| 4 | 桃太郎 | 小学国語読本巻1 |
| 5 | ネズミ ノ ヨメイリ | 小学国語読本巻2 |
| 6 | 富士山 (詩) | 小学国語読本巻4 |
| 7 | コダマ (戯曲) | 3年生家庭読本 |
| 8 | 天長節 (詩) | 小学国語読本巻5 |
| 9 | ヒナマツリ | 編者作 |
| 10 | 動物園 | 小学国語読本巻5 |
| 11 | サクラ | 編者作 |

戦前・戦中の在日留学生に対する直接法による予備教育用日本語教科書

- | | | |
|----|-----------------|-----------|
| 12 | コヒノボリ | 編者作 |
| 13 | オ月サマ ト ヨウフクヤ | 小学生全集 |
| 14 | 浦島太郎 | 小学国語読本巻3 |
| 15 | 東京駅デ | 編者作 |
| 16 | 春が来た (唱歌の歌詞) | 小学国語読本巻3 |
| 17 | かへる | 小学国語読本巻3 |
| 18 | やくそく | 尋常小学修身書巻2 |
| 19 | 手紙—先生へ— | 編者作 |
| 20 | 日記 | 編者作 |
| 21 | 羽衣 (戯曲仕立て・韻文つき) | 小学国語読本巻4 |
| 22 | 国歌「君が代」 (国歌の解説) | 編者作 |
| | カナ ト ローマ字/漢字表 | |

『日本語教科書 巻二』昭和16年9月

歌「隣組」楽譜つき

- | | | |
|----|-------------------|------------------|
| 1 | 国旗 | 編者作 |
| 2 | 菊ノ花 | 編者作 |
| 3 | 隣組 (歌詞) | |
| 4 | 電話 | 編者作 |
| 5 | 日曜日ノ朝 | 編者作 |
| 6 | こぶとり | 編者作 (編) |
| 7 | ケンコウ | 編者作 |
| 8 | お客様と紹介状 | 編者作 |
| 9 | 招待状と返事 | 編者作 |
| 10 | お月見 | 編者作 |
| 11 | 俳句 (小林一茶) | 編者編 |
| 12 | 火事 | 編者作 |
| 13 | 郵便 | 編者作 |
| 14 | 雪舟 | 小学国語読本巻6 |
| 15 | 末広がり (狂言を書き直したもの) | 編者作 (編) |
| 16 | 諺 (格言) | 編者編 |
| 17 | 鉄工場 (口語自由律の詩) | 小学国語読本巻7 |
| 18 | 博愛 | 尋常小学修身書巻4 |
| 19 | 日本ノ正月 | 編者作 |
| 20 | 入学試験 | 編者作 |
| 21 | 河馬 | 幼稚園談話集 |
| 22 | 太陽 (科学読み物) | 少年少女科学理化学篇 |
| 23 | 心に太陽を持って (詩) | 原詩 ツューザル フライシュレン |
| 24 | 野口英世 | 編者編 |
| | かなづかひ と 発音/漢字表 | |

『日本語教科書 巻三』昭和17年3月

歌「椰子の実」楽譜つき・明治天皇の短歌2首

- | | | |
|---|------|-------|
| 1 | 友達 | 編者作 |
| 2 | くもの糸 | 芥川龍之介 |

- | | | |
|----|------------------|--------------------|
| 3 | せんりゅう (作者名 記載なし) | 編者編 |
| 4 | 日本の母親 | 日伊協会会報 野上弥生子 |
| 5 | 良寛 | 相馬御風 |
| 6 | スキー旅行 | 編者作 |
| 7 | 病気見まひ | 編者作 |
| 8 | やしの実 (歌詞) | |
| 9 | 海外放送 | 編者作 |
| 10 | 身体に関する言ひ回し | 芳賀矢一「筆のまにまに」より |
| 11 | 蘭学の始め | 杉田玄白原著 緒方富男訳「蘭学事始」 |
| 12 | 豊田式自動織機 | 小学国語読本巻8 |
| 13 | 日本ノ産業 | 尋常小学地理書巻2 |
| 14 | 短歌 | 石川啄木 |
| 15 | 小泉八雲 (戯曲仕立て) | 編者作 |
| 16 | 送別会 | 編者作 |
- 形容詞・動詞・形容動詞・助動詞の活用表／漢字表

『日本語教科書 巻四』昭和17年11月

歌「海ゆかば」(万葉集から) 楽譜つき

- | | | |
|----|----------------|--------------------------------------|
| 1 | 短歌 | 正岡子規・伊藤左千夫・長塚節・島木赤彦・若山牧水 |
| 2 | 片言を言ふまで | 金田一京助「北の人」から |
| 3 | 茶わんの湯 | 寺田寅彦 少年少女科学理化学篇 |
| 4 | 安寿と厨子王 | 森鷗外「山椒大夫」から |
| 5 | 挨拶—世界教育会議開会の辞— | 永田秀次郎「国民の書」から |
| 6 | みかん | 芥川龍之介 芥川龍之介全集 |
| 7 | 日本ノ憲法 | ^{みつぎ} 三瀨信三 日本児童文庫「法制経済の話」カラ |
| 8 | 落葉松 (文語定型詞) | 北原白秋 |
| 9 | ホトトギスの習性 | 内田清之助「渡り鳥」から |
| 10 | 創造と模倣 | 田中寛一「日本の人的資源」から |
| 11 | 陣中に源氏物語を講ずる話 | 富倉徳次郎「図書」から |
| 12 | 東郷元帥と乃木大将 | 安部能成「青年と教養」から |
| 13 | 地震と災害 | 和達清夫「地球と人」カラ |
| 14 | 海彦山彦 (戯曲) | 山本有三「山本有三全集」から |
| 15 | 相模灘の落日 | 徳富蘆花「自然と人生」から |
| 16 | 明日への希望 | 天野貞裕 ^{アインワウ} 「学生に与える書」から |
- 漢字表／作者紹介／文語の活用表

『日本語教科書 巻五』昭和18年4月

歌「愛国行進曲」楽譜つき

- | | | |
|---|-------------|----------------------------|
| 1 | 日本語の特質 | 小倉進平 国際学友会昭和13年夏期日本文化講座講演集 |
| 2 | 富士登山 | 冠 松次郎「峯・巒・ビンカ」 |
| 3 | 俳句 | 松尾芭蕉・与謝蕪村 |
| 4 | 猫と鳥 | 夏目漱石「吾輩は猫である」 |
| 5 | 人生と経済 | 高木友三郎「統制国民経済学」 |
| 6 | 季節風 (科学読み物) | 大谷東平「暴風雨」 |
| 7 | 城の崎にて | 志賀直哉「志賀直哉全集」 |

戦前・戦中の在日留学生に対する直接法による予備教育用日本語教科書

- | | | |
|----|-----------------|------------------|
| 8 | 鼠の湯治 (科学読み物) | 中谷宇吉郎「続 冬の華」 |
| 9 | 科学者とあたま (科学読み物) | 寺田寅彦「天災と国防」 |
| 10 | 自然科学と人 | 橋田邦彦「行としての科学」 |
| 11 | 万葉集抄 | |
| 12 | 軍人の母の手紙 | 山内達雄の母ヤス 海軍館許可済 |
| 13 | 敬天愛人 | 西郷隆盛「西郷南洲遺訓」 |
| 14 | 日本の風景と建築 | 岸田日出刀「薨」 |
| 15 | 中宮寺観音 | 和辻哲郎「古寺巡礼」 |
| 16 | 日本的な美 | 岡本義恵「芸術論の探求」 |
| 17 | 敵討以上 (戯曲) | 菊池寛「菊池寛全集」 |
| 18 | 武士道 | 大道寺友山「武道初心集」 |
| 19 | 必死の時 (詩) | 高村光太郎 詩集「大いなる日に」 |

漢字表/助動詞相互の接続表/作者紹介

資料2 戦前・戦中の国際学会会の日本語教育関係者一覧

(当時の関係者の証言や文献資料から筆者がその姓名を特定できた方のみをまとめてみたものである。)

(年度)	1936	'37	'38	'39	'40	'41	'42	'43	'44	'45
鈴木忍	(バンコク日本語学校)
村田伝悟	?	?
大島優美
服部四郎
岡本千万太郎	(北京へ)
松村明	(文部省へ)
永島愛子
林和比古	?
武宮りえ
水野清	(横須賀中学校)	(帝国女専)
弓削田万寿美	(恵泉女学院)	?
村岡成美	?
川俣晃自	?
菊地靖
石川道雄	(東京府立中学校)	?
高橋一夫	(東京府立中学校)
(辞書編集部)
大西雅雄	(駒沢大学 兼任)	?
金田一春彦	(日華学院 兼任)
和田実	?